

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	Romain Claude Jourdan
論文題目	<i>Des ouvrages de géographie universelle dans le Japon du XVIIIe siècle : sources, structure et contenu.</i> (18世紀日本における世界地理書——典拠、構造と内容)		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、18世紀日本の世界地理書とその西洋の典拠の関係を論じたものである。当時、日本においては、いわゆる鎖国のため、西洋についての知的情報源は主として舶載書であった。日本人によって書かれた世界地理書が結局のところ、典拠となった洋書の単なる翻訳・翻案に過ぎなかったのか、あるいは典拠から独立し、作者の関心・意図が現れた独自の著作となっていたのか。そうした典拠の影響の射程を明らかにすることが本論文の目的である。</p> <p>そのために、申請者は、18世紀日本において重要な6種類の世界地理書について、その種々の典拠を確認した後、それら典拠の構造・内容と6種類の世界地理書の構造・内容を比較分析した。そのうえで、6種類の世界地理書相互を比較し、百年の間に執筆されたそれらに、地理学の解釈・方法に関するなんらかの系統が見られるか否かを検証した。本論文が年代順の構成を取り、典拠となった洋書の刊行年によって、二つの時代区分に相当する、二つの章に分かたれる所以である。</p> <p>第1章では、いずれも17世紀の典拠と滞日中の西洋人からの情報によって著された3種類の世界地理書を分析する。『増補華夷通商考』(西川如見著、1708年刊)は、長崎に輸入された外国の物産を主に扱う。自国中心主義的な構造を持ち、中国、日本、そして、日本と交流のあったオランダとの関係から世界の国々を『職方外記』(イエズス会士ジウリオ・アレニオ著、1623年刊)によって紹介する。『采覧異言』(新井白石著、1713年成)は、日本初の非自国中心主義的な体系、つまり大陸別の構造を採用する。白石は『坤輿万国全図』(同会士マテオ・リッチ著、1602年刊)、『地球図』(オランダ人ヨアン・ブラウ著、1648年刊)など多くの典拠を比較し、主に西洋の宗教と政治について考察する。そして、時代をかなり下った『新製地球万国図説』(桂川甫周著、1786年成)は、白石が『采覧異言』の執筆に際して参照したとされるブラウ『地球図』の解説を逐語訳したものである。そのため、構造・内容についての著者の裁量はないに等しく、叙述ももっぱらオランダ、言うなれば、西洋からの視点に終始している。</p> <p>このような相違はあるものの、これら3種類の著作には大きな二つの共通点を見出しうる。一つは、序文などに明らかなように、著者が西洋の地名・人名、さらには爵位などを、漢字や仮名を用いて能う限り原音に近く表記し、より正しい情報を提供することに腐心していたことである。その努力は度量衡、年月日などの換算にも及んだ。さらに一つは、各著作に叙述される内容も類似していることである。国の紹介は簡略であり、その叙述には、地理的位置・気候・物産・風俗といういくつかの共通のテーマが見られる。これらの基本的な要素は、西洋の伝統的な地理学の基礎理論を構成するものであった。すなわち、地理的位置と気候が物産を決定し、物産が風俗と国の文明を決定すると</p>			

されるのである。日本では、西川如見がこの理論の影響を受け、1720年の『日本水土考』において日本の優越性を主張する根拠としている。

第2章では、いずれもドイツ人地理学者ヨハン・ヒュブネルによるオランダ語版地理書を主要典拠として18世紀末に執筆された次の3種類の著作を分析する。『泰西輿地図説』（朽木昌綱著、1789年刊）は、『簡約古今地理学』（初版1707年、数回改訂）を骨子として、内容を『コウラント・トルコ』（地理・歴史事典、1732年版と1748年版あり）で補っている。ヨーロッパの国々をテーマ別と地方別の構成をもって極めて体系的に叙述し、教育的配慮の行き届いた著作である。『翻訳地球全図略説』（桂川甫周著、1791年成）は、前世代の地理書同様、国の紹介は簡略である一方、国々の紹介に、項目別に番号を付して地名を多数列挙した長大なリストを続けている。これは地図を読み解くうえでの便宜を図ったものといえる。その典拠は6冊本『ゼオガラヒー』（1769年版）またはその類版『青少年の世界地理』と推定される。『訂正増訳采覧異言』（山村才助著、1804年成）は、1713年の『采覧異言』の構造・内容をすべて踏襲しつつ、『コウラント・トルコ』（1748年版）のほか、計130種類もの典拠からの新たな引用によって、『采覧異言』を増補した著作である。これら3著作の共通点は、一つには、前世代同様、西洋の地名・人名の能う限り原音に近い表記、度量衡、年月日などの正確な換算に対する強い意思である。蘭学の進展により、こうした翻訳・換算の精度も格段に高まっている。さらに一つの共通点は、扱う情報量が前世代の著作に比して格段に増大したことである。特に『泰西輿地図説』と『翻訳地球全図略説』においては各著作の構造が著しく体系化され、これまで紹介されなかった都市や地域、河川や山岳が詳細に紹介されるようになる。また、『訂正増訳采覧異言』は、和漢洋に亘る新たな典拠によって18世紀世界地理情報の総合化を図り、18世紀地理学史ともなっている。

結論においては、6種類の世界地理書の分析結果がまとめられる。まず、地名・人名の表記、度量衡、年月日などの換算、さらには、地理学上の記述のカテゴリーに関して、18世紀日本の世界地理学には、正確を期する東洋的な実証精神が一貫して存在していることが証明された。また、これらの世界地理書において、西洋の典拠が決定的な要素となっていることが浮き彫りにされた。のみならず、同時代の西洋の世界地理書に顕著となっていた情報量の増大に伴う、内容の複雑化と構造の体系化の傾向も確認された。とはいえ、日本の地理学者たちが西洋の地理書を単に翻訳・移入するに甘んじていたわけではなく、6種類の各世界地理書が、各著者の関心と狙いによる独自の構造・内容を具備していることが明らかにされた。以上が本論文の成果であるとされる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文の評価すべき優れた特色として、以下の5点を挙げることができる。

第1に、西洋起原の典拠をもとに編纂された18世紀日本の世界地理書を対象にして、フランス語で書かれた最初の総説であり、フランス語圏およびフランス語を解する国際的な18世紀研究者に対する学術的貢献となっている。対象として選ばれた原典6種、すなわち『増補華夷通商考』（西川如見著、1708年刊）、『采覧異言』（新井白石著、1713年成）、『新製地球万国図説』（桂川甫周著、1786年成）、『泰西輿地図説』（朽木昌綱著、1789年刊）『翻訳地球全図略説』（桂川甫周著、1791年成）、『訂正増訳采覧異言』（山村才助著、1804年成）はいずれも、これまでフランス語圏では本格的な内容紹介と分析がなされてこなかった。

第2に、申請者はフランス人留学生としての語学的制約を克服して、江戸時代の原典をよく読解し、典拠の特徴と照らし合わせながら、それぞれの構造的特徴と内容的特徴を比較検討することに成功している。例えば、同じ蘭学時代の世界地理書にもかかわらず、桂川甫周の『新製地球万国図説』『翻訳地球全図略説』がオランダ語原典の直訳に近い翻訳であるのに対し、朽木昌綱の『泰西輿地図説』は著者独自の問題関心（都市と河川）と東洋の伝統的な記述カテゴリーをもとに、複数のオランダ語原典を編訳しており、山村才助の『訂正増訳采覧異言』は新井白石『采覧異言』の訂正増訳という制約のなかで、18世紀世界地理情報の集成となっていることを明解かつ実証的に説明している。望むらくは、各地理書の構造的、内容的特徴を生み出しているそれぞれの著者の問題関心、著述の動機、著者の社会的あるいは政治的立場、および同時代の歴史的背景について、より深い考察を加えれば、力動的な叙述となったであろう。

第3に、本論文は対象となった世界地理書の従来不明であった典拠の解明に重要な貢献をしており、その学術的な貢献は大いに評価すべきである。すなわち、確かに申請者は西川如見『増補華夷通商考』、新井白石『采覧異言』および桂川甫周『新製地球万国図説』の典拠については従来の研究に負っているが、朽木昌綱『泰西輿地図説』は主としてヨハン・ヒュブネル『簡約古今地理学』（初版1707年、数回改訂）を骨子として、同じ著者の『コウラント・トルコ』（地理・歴史事典、1748年版）によって内容を補っていることを初めて実証した。また、桂川甫周『翻訳地球全図略説』の典拠はヒュブネルの6冊本『ゼオガラヒー』（1769年版）またはその類版『青少年の世界地理』（版種不明）と推定されることを指摘した。さらに、山村才助『訂正増訳采覧異言』の「増訳」項目に典拠としてしばしば挙げられている『万国航海図説』（ピーテル・ホース未亡人刊、刊年不明）からの引用文は、新井白石が参照したとされるヨアン・ブラウ『世界図』（1648年刊、東京国立博物館蔵）下部の解説文『地表の区分・形態・特性の略説』とほぼ一致することを発見し、山村才助が使用した『万国航海図説』の版種確定に重要な手がかりを提供した。今後、不明典拠の確定作業をヨーロッパ地域以外のテキストに拡大すれば、より多くの成果が得られるものと期待される。

第4に、申請者は地理学上の記述に含まれる世界史情報に注目し、6種の世界地理書のヨーロッパ地域のテキストを精査し、『采覧異言』から『泰西輿地図説』へ、さらに『訂正増訳采覧異言』へと18世紀日本における西洋史情報の内容と増大過程を解明したことは、従来にない新しい試みである。今後、典拠の解明と並行して、世界史情報全体に分析を広げることが望まれる。

第5に、申請者は6種の世界地理書のヨーロッパ地域のテキストを精査して、漢字または片仮名による地名表記（国名・州名・都市名）の変遷を辿り、利瑪竇『坤輿万国全図』や艾儒略『職方外記』などにおける伝統的地名表記が踏襲された歴史的射程を解明した。惜しむらくは、地名表記のもととなった漢文、ラテン語、オランダ語との比較分析によって、各著者の博言学的な知識の検討がなされなかったことである。

本論文の弱点は、典拠と構造と内容の分析において、典拠のテキストとりわけ漢文またはオランダ語のテキストと分析対象のテキストとの綿密な比較検討の過程が過不足のない例示で示されていないことである。これは本論文がフランス語圏およびフランス語を解する国際的な18世紀研究者を意識した叙述スタイルを取っていることによるやむを得ない面もあるが、十分な例示があればより説得的な論文となったであろう。しかしながら、本論文は上述の優れた特色を有している。

以上を総合して、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成25年1月4日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降